

# 「主人公は私！」

崔 恵秀

## 目次

- 1 . 動機
- 2 . インタビュー
  - 2 - 1 . 外国人の友達
  - 2 - 2 . 人との付き合い方  
自分から積極的に行動する  
人間関係で大切な物
  - 2 - 3 . そして、未来
- 3 . 発見
  - 3 - 1 . 認識 - 魅力とは？
  - 3 - 2 . 結論 - 動機から見たインタビューの結果
- 4 . 終わりに

## 1 . 動機

「日本人らしさ」とは何か。それは私にはまだ分からない。でも何故か、日本人の性格を分析する本が多くてよく売れている。外国人が書いた「菊と刀」のような本もあるが、日本人の作家が書いた本も多い。日本人が自分たちに絶え間なく「私たちは誰なのか、どんな性格を持っているか」と聞いている。

同じ社会制度の中で作られる性格に対する一言の評価は皮相的になるしかない。そのような評価を見ると、大体「日本人は秩序を尊重し、集団主義が強くて自分の本音を表さない」と書いてある。「日本人は全部こうだ」と言うような言い方は固定観念に見做されやすいとしても、なぜか私が付き合いしてきた日本人の中にはそれを外す人があまりいない。腹を割ることができる人は韓国人の中にもなかなかいないが、日本人にはもっと近づきにくい。それは私の中に潜在している思考の型のせいかも知れない。ひょっとしたら違う国の人とは共有できない感情があるのかも知れない。それに、言語で自分の考えを伝えるこの世には言語がもたらす誤解がありうる。私が言ったことを他人が完璧に理解してくれることはできないと思う。そんな面で私は他人、まして外国人に対してはかなり厳格で閉鎖的なタイプである。

そんな私が城田さんに会ったのは去年の六月、横浜へ行った時だった。城田さんは私の日本語先生の友人で、その時一緒に行った先生に紹介してもらった人である。見た目だけ

では普通のサラリーマン。しかし、口を開いたら、私が付き合ってきた日本人とは違う感じだった。親密な微笑みで「韓国人は日本人と違って率直だ、ありのまま外に表す部分が気に入る」という城田さんには今まで付き合ってきた日本人とは違う感じがした。私には他人のことを僅かな時間の映像で覚えるくせがあるし、記憶力もよくない。正確に思い出す言葉はこれだけで、後は韓国が好きで韓国語を勉強したことがある、何人か韓国人の友達がいる、奥さんが家で直接キムチを漬ける、などの話もした覚えがある。そして一緒に歩き回りながら何となく心が温かくなって、ふと気がつくとは私はずっと笑っていた場面も浮かんでくる。

その時、私の心境はかなり複雑だった。城田さんが与えてくれた響きは心の安らぎと韓国人としての共感、ありがたさだけではなかった。私が勝手に決めていた日本人のイメージが変えて行くような感じ。そして不思議といつの間にか気兼ねなくなっている自分に気づいた。では、この人は今まで私が分かってきた日本人とは違うているのか。そうだとしたら、一体何が違うているのか。私の目に映った城田さんは顔つきが豊かで、感情の表現も豊富だった。それが私に慣れている韓国人らしさなのかも知れない。それで心が引かれたのか。

話したいことはたくさんあったのに、その時は旅行の日程のため東京に帰るしかなかった。名残惜しい気持ちで横浜を立ち去りながら、いつかはこの人の話を聞いてみよう、と思った。城田さん自身が感じる日本人らしさとは何か。私の国、韓国は城田さんの目にどう映るのだろうか。城田さんの話を聞かせてもらいながら、私も気づいていない自らを省み、私に感じられたその響きの正体を探してみたい。

## 2. インタビュー

インタビューという形式に（名前だけそうだったのかも知れないが、）負担を感じていた私は、どのようにインタビューを始めればいいのか、どのように進んで行けばいいのか迷っていた。会うのは2回目なのに、とても親しみのある城田さん。私が緊張していることをからかうやんちゃなこの人を前にして自然に笑いながら対話が始まった。

### 2 - 1 . 外国人の友達

まず、韓国が好きだという理由が何か尋ねてみたいつもりで、韓国のことを尋ねて見たが、意外の話が出てきた。

韓国に関心を持つようになったきっかけはなんですか？

98年の韓国への家族旅行。ドンデムンで、韓国人が話をかけてきたんですよ。最初には気づかず日本人だとずっと思っていて、話し方が全然日本人と一緒にだったから分からなかったけど2時間ぐらい話した後「私は韓国の人です」と言ってびっくりして、その

時から彼と仲良くなったのが韓国の人との付き合いの始まりでした。それから韓国の人たちとのネットワークがだんだん広がったという感じかな。

では韓国人の友達は何人ぐらいいますか？

日本人よりも多いね。2～30人かな。

ええ、なにこの人??自分の国の友達より韓国人の友たちが多くてありうることなのか?最初には信じられない話だったが、私が感じた親近感の理由がそれだったのかも知れないと思った。私は人に会う時、ある特別な技術があるとは思わない。でも経験によるノウハウとか習慣とかは確かにあると思う。それで城田さんは韓国人に慣れていて、私が感じた親近さの正体はそのせいだったかな、と思いながら質問し続けた。

他の韓国人にはどのようにして会うようになりましたか？

紹介と。自分から働きかけて友達になっている方が多いか。今回も、イ先生(私の日本語先生)が日本に来て「俺が行きます」と言わなければ会えなかったでしょう。

(奥さんの話によると、「韓国の女の子がいっぱい来るから」と喜びながら家をでたそうだが・・・^^)

それは、日本人ばかりと付き合ってもしょうがないと思うからだな。

へー?それは何の話ですか？

同じ感覚の人と付き合っても面白くないでしょう。だから他の外国の人の考え方を仕入れた方がいいのかな。色んな見方が出来る人と友達になりたいと思っている。

最初に会った時、この人は外国の人に対して日本人と同じように思っている人なのかな、それでこれほど気兼ねなく接してくれるのかな、と思ったのだが、やはりこの人も外国人を「違う感覚の人」だと思っているのだ。その「違う感覚」については後で聞くことにして、とりあえずは湧いてくる疑問を解決したいと思った。

いくら違う感覚の人が好きだとしても、自分の国の友達より韓国人の友達が多くて、留学の経験もない人。自分から働きかけて韓国人の友達を作る。何故??私のクエスチョンマークは続いた。

わあ・・・でも、何故韓国の友達が日本人の友達より多いんですか？

わかんない。なんで韓国人の友達が多いか? 気を使わなくていい、というところがあるのかな・・・一番の理由は利害関係がないって言うところかな。利害関係がないと気持ちがよく付き合えるでしょう。一緒に仕事をやると、相手が望んでいることと私が望んでいることと違いがある。それで意見の相違があるわけじゃない? そこで衝突があったりする。

やっぱり利害関係が発生するといいいだけに終わらない部分があるんだよね。だから、日本の社会にいと、基本的には仕事を中心としてその後生活がある。というスタイルになっているから、そう考えると仕事になるとやっぱり利害関係が発生して、気を使わなければならないところがあったりするから、なかなか友達という風には、もちろんいるんだけど、利害関係があんまり少ない人の方が友達とかになっていたりするのかな。

これで疑問が解けたとは言えない。口調から見ると、自分さえ知らないうちに韓国人の友達が増えてきたようだった。ただ城田さんの「人との付き合い方」だけに近づいたような気がした。城田さんは、心から、本音で付き合える人が好きなのだ。懐の中に自然と入り込める友達が好きなのだ。私はまだ学生なので、利害関係ということには理解できない部分もあると思うが、やはり私にも「仕方なく付き合っている人」はいるから、ある程度は納得できる。そうだとすると、城田さんは珍しく思われる。それは、自分が外国人に対して閉鎖的なタイプであるせいかも知れない。

## 2 - 2 . 人との付き合い方

### 積極的に自ら行動する

話は自然と私の留学生活に移っていった。私が悩んでいる外国人との関係、日本に来てから二ヶ月も経ったのにまだ感じられる距離感について色々話し合った。悩みの相談のよな形になっているが、この相談を通じて城田さんの魅力をさらに感じる事ができた。

---

城田さんは外国人に会う時、偏見とか既に持っているイメージが作用しないですか？

「偏見」とは本来どのようなものだろう。主観的？客観的？これはもともと主観的なものであって、それは文字や本から学び取ることよりも、経験から来ることということの方がはるかに影響力の高いのではないかと思う。

それはそうですね。本当に浅い経験だとしてもそのイメージがより強いですよ。

でもあなたはそんなに日本人と距離感を感じるようには見えないけど。あなたはよく日本人の人とメールしているよね？

してはいますが、間にある壁があるような気がします。もちろん言葉の壁も無視できないものですが、感情的にもっと大きな壁が。

恵秀ちゃんが考える日本人学生は、心の底には何か考えを持っていることは分かるけど、それが何を考えているかはわからない学生達のことかな？

そんな感じ。

よく言えば「おとなしく控えめ」悪く言えば、「何を考えているか分からない」と言った感じかな。こういう雰囲気を持っている場合は、やはり留学生である自分からきっかけを作ってあげることがいいのかなあと思うのね。本当はまったく逆で日本人学生が、留学生にやってあげなければいけないのにね。方法は何でもいい。授業中に飴をあげるとか、冗談を言うとか何でもいいけど僕のように相手が笑うようなことをしてあげればどう？自分が仲良くなりたい意思を気持ちで伝えて。

恵秀ちゃんが日本人の友達に関して、距離感を感じる程度でよい関係でいいと思うのなら、それでよいと思うけどやはり親友までに行かないにしても仲の良い友達を作るとするならば、やはり積極的に自ら行動して「とても仲良くなりたい」という意思を見せることが重要でないかなー。僕が見るに恵秀ちゃんは、あまり自分を表現することは得意ではない人かなあ、と先日会った時に見受けられたけど。

因みに、私は気が小さくて人見知り激しいというか、そういう性格を持っていると思う。そのうえ、あまり考えていることを話さないタイプで、このような印象を受けた人が多いと思う。時間が経つにつれてその印象は薄くなっていくという話もよく言われるが、私は基本的に言語という手段を信じない。しかし人とのコミュニケーションの手段は身振り手振りの他、一番便利な言語しかない。こう考えているせいか、自分から働きかけて友達になる場合はあまりない。特にここに来てからよく考えることが、「どういう話をすればいいのかしら」、「私がこうすると相手にどう思われるか」などである。(それは私の日本語がまだ完全ではないのです懸念も含めている。)つまり、いつも何かが不安で心配している状態だとも言える。城田さんの話を聞かせてもらいながら思い知ったのは、私が距離感を感じる人たちも私に距離感を感じているかも知れない、ということだ。私は相手が外国人であれ韓国人であれ、今まで積極的に人に近づいていったこともなく、ずっと相手が近づいてくるのを待っていたのだ。期待してみたらその後、失望したり、満足したりしているのだ。そしてそんな自分の性格と反対に、城田さんは積極的に働きかけて人間関係を広げていくタイプだったので、人間関係のバランスがよく合ったのでは、私は持っていない積極的な姿勢から魅力を感じられたのでは、と思った。

---

## 人間関係で大切な物は？

(続いて)はい、それが問題です。アドバイスでも・・・；；

俺は営業マンだからこの人がどういう感じの人なのかという感覚は、営業をやったことがない人よりもよく分かるから、もしかすると相手の日本人も「恵秀ちゃんはどういう人

なのかなあ。」とまだ分かっていない部分もあるかも知れない。対人関係で人にアドバイスするならば、「前に」「アクティブに」「本音」この3つだけ持っていればすべてOKだと思うんだけど。

でも、私にはそこが難しいところですよ。

僕の場合、外国には住んだことがないからなんともいえないけど、ほかのアジア人の国であればほとんど抵抗なくそのままを受け入れるでしょう。それは、アジア人に対しては外国人という意識がまったくないからなのよ。また、友人関係に悩む問題は多少あるかも知れないけど本当の腹を割って話せる友人とはごく限られた小数、1人・2人は作ることが出来ると思うよね。それは、自分に自信があることと、相手を信用することが出来るから。少数の親友と言ったけど、なぜかという、親友とは100人もいることはありえないから。

では、もしアメリカに住んだらどうか。これはなかなか厳しいかもしれないんだよね。でも多分僕にはそれを乗り越える自信がある。もし距離感を感じたならば、頭を使って色々方法を考えるでしょう。たとえば、僕ならば間違いなく、相手を自分のペースに巻き込むよね。それこそ何か文化的なもの、日本らしいことを持ち出して相手に興味を持たせて、そして「僕はこのような文化の国の日本から来ました。だからあなたも興味を持って理解してください。そして友達になりましょう。」という具合かなあ。でも、最終的には白人だろうととても気の合う人間もいれば、またアジア人でも気の合わない人もいるから、いずれの方法論はあるにしても友達を作ることの本質的なところは誰に対しても変わらないね。

(#城田さんには白人に対するステレオタイプがあった。「本当はいけないけど、私はこう思う。何故かなあ。」という言葉は何度も口にしていた。それについても話し合ったが、ここでは省略する。)

その本質的なところとは？

友達でもあり強力なパートナーである条件としてはやはりお互いを信頼し合えることがもっとも重要だと考える。だから、彼らが困っているときには僕に出来ることならば助けあげようとも思うし、その「逆もまた真なり」だとも思うの。

では城田さんは信頼し合える人が外国人の中に多かったんですよね？

外国人の友達を持つことは僕にとって自然なことで、いろいろな価値観を聞けることは楽しくて勉強になることもそうだけどね、少しいやらしい表現だけど、今後自分が将来行っていくビジネスに対して彼らが強力なパートナーと成り得るということもあるのよ。

(#その日、一緒に横浜ラーメンを食べたが、城田さんは私に何度も何度もその味がどうだったか聞いてきた。その理由を聞いてみたら、将来、韓国とか中国でラーメンのビジネス

スをしたいと答えた。その話は最後にある。)

特に親しい韓国人の友達が多いのは、その信頼感とも関係があるのでしょうか。

僕にとって韓国人は特に意識を感じさせることが非常に少ないね。友達が多いのも、その部分や、あるいは僕の環境的なものがあるからかなー。韓国人と知り合う機会が多いから。でもやはり行き着くところは「情」に左右されているのね。

その例が、僕の親友でヨンジュという同年代がいるけど、彼とはお互いしゃべれないからほとんど会話が成り立たない。でもお互い親友と認識しているんだよね。今アメリカから僕のいとこが日本に留学しているけど、彼よりもヨンジュの方が、はるかに心が良く通じることが自分でも分かるのよ。こんな感じで答えになったかな??

はい、なりました。^^

---

インタビューしながら感じたことは、城田さんのオープンな性格と私の性格には極端な差があるということである。その差は性格ではなく、視野の幅なのかも知れない。

## 2 - 3 .そして、未来

後は、城田さんの学生時代、友達、仕事について話し合い続いた。特に仕事について多く話したが、この話もまた前の話と繋いでいると思うのでここに述べてみる。

一番好きなのは日本なんだよね。何でもかんでも言って好きなの。自分が、日本が好きだからこそ、他の国の人と色々話をして、自分がやっぱり日本が好きだと言うことを再確認しているのよ、感覚的には。だから、他の国の人と付き合ったりして、色んな考えらとか色んな知識とかを結びつけていて、かつ他の外国の人とも皆が仲良くできるように。自分の国だけお金持ちになろうって言う考えは良くないでしょう。だから、最終的には自分の欲求を満たすためにはやっぱりお金というのが必要だから、それをいっぱいもらうことは非常に大切なことだと思うんだけど、でもそれを自分だけお金を集めるというのは良くないことでしょう。だから、俺がアジアでビジネスをやりたいと思うのはもし僕が韓国に行って商売を始めたら、韓国の人を雇うのが出来るよね。日本のラーメンと言うのを韓国の人にしてもらうことが出来るんだよね。そうすることによって、韓国の雇用を進展してあげるのは出来るわけでしょう。ビジネスを何のためにやるか、そんな根本的なところを考えて見ると、簡単に崩れるものがあればビジネスってできないと思うの。雇用、経済・良くしてあげたい、仲良くしたいという心があるからこそしたいと思うの。景気が悪ければ崩れそうだと思ったりしても何か一つあれば続けるところがある、と思うんだよね。だからあんまり日本では商売したいとは思わない。したら中国とか。自分の欲求を満たすためのものはあるんだけどね、お金を儲けたいというのは。でも中国でやることによって

食生活の選択肢が一つ増えるというのはいいことでしょう。何でラーメン屋を選んだのかわからないけど、(ラーメン屋を選んだ理由は城田さんのラーメンを食べる様子から明らかになった。^^)韓国でも。文化的に見ても、他の国の人が日本を分かってくれるし、というところがあると思うんだよね。

---

夢中になって話を聞いた後、私は自分を省みられ、悟ったことがある。ここに来る前に書いた留学計画書に、「私は視野を広げて行きたい」と書いたものの、相変わらず自分の立場からしかこの世を見ていなかった。目はずっと前を向いて、右側と左側には何があるかわからないまま歩いてきた。対人関係においても、将来の夢でも、前を向いたままで周りを見回すこともなくずっと狭い直線の道を歩いてきたのだ。

「留学生活はどう？友達はできた？」と聞かれたら「うん、楽しい、いい人ばかりだよ！」と答えながらも、頭の中では「日本人って、近づきにくいかしら」と思っていた。友達を作る私は存在しなかった。「卒業したら何をしたい？」と聞かれたら「XX会社で働きたい、XX大学院に進みたい」と答えていた。そこには仕事をしている、勉強している私がいなかった。不思議なことに、私は私の立場からしか見ていないくせに、私自身は見えていなかったのだ。

結婚したばかりの城田さんは、いつか鼻歌を歌いながら「面白いなー今は、未来のことを色々考えなきゃならないから」と言った。多分、私が一家を支えなければならない立場だったら文句ばかり言うに違いないだろう。人生を積極的に生きて行く城田さんの前で、私は何か恥ずかしくなっていた。質問することさえも面映くなかった。城田さんが全部正しいとは言えない。そして私の性格が悪いとは言えないとしても、私の狭い視野に作られた考えは恥ずかしく思うしかない。

よりいい結論で終わればいいのに。結局、心の中で自分を責めながらインタビューを終えた。せめては私の視野が少しだけでも広がったと考えてみると、十分慰安になることだが。

### 3. 発見

#### 3 - 1 . 認識 魅力とは？

子供の頃、私はある友達に憧れていた。私は何となくその友達をうらやましいと思っていた。その感情はより大きくなってから習った嫉みとか嫉妬ではなく、純粋な意味のうらやましさだった。私の目に、その友達は完璧で魅力に溢れていた。それで憧れた。何が完璧だったのかは覚えてない。ただ単純に、彼女には短所がないように見え、私は彼女に憧れた。私は彼女になりたいと思った。これは劣等感とか私の立場に満足しない、そのよう



な意味ではなかった。立場と満足はその後で習った概念だった。子供の遊びのように、互いの頭の上に手を置いて「チェンジ!」と叫ぶと換わればいいのに、と思った。それは服を換えて着た王子と乞食の話のように、正当な取引だった。しかし、それは私の想像の中だけで正当な取引だった。完璧な彼女が私と換えてくれるはずがなかった。

現実に基づいた空想は凄惨なものだ。幸いに、私は彼女が好きだったゆえにその感情は嫉妬にならず、頭の中をぐるぐると回るだけだった。そして、心の中で私は妥協し始めた。しかし、妥協をしようとするや否や私の最初の問題点は始まった。なぜなら、私は彼女のいいところについては詳しく分かっていたものの、私については全然分かっていなかったから。もちろん、私が彼女を見るように、私を見るためには鏡の前に行って立てば済むことだった。しかし、私が見える鏡はなかった。私は見えなかった。友達に見えるのに私は見えなかった。ただ私の存在だけが感じられた。彼女をうらやましがっている存在が感じられたから。結局、私がその友達をうらやましがるとして核心的な理由は彼女が完璧な理由でなく、私については何も見えなかったからだという結論まで思い至った。

しかし、このような結論はもっと大きくなった時の結論で、当時に下した結論はただ「彼女のすばらしさに見える、私は見えない」だった。結局、私は多分彼女の「見えるすばらしさ」を真似するために楽しく努力していたと思う。(不幸中の幸い、挫折はしなかった。)そしてその過程の中で私と世界の間には線を引き、区分し始めた。区分というよりも、私の領域を決めて、その中に私の物を入れてきたと言った方がましなのかも知れない。最初にはそこに何もなかったから、あるとしても何も見えなかったから、それは楽しいことだった。私の欠乏を満たすために、また外に目を向かい始めたのだ。当時と今の違いを言えば、今は時々線の中にある私に気づくことがあるということだが、より大きな違いは、今は挫折感とか敗北感さえ感じられることもあるということである。しかし、相変わらず私の視線は外に向かっている、相変わらず線引きをしている。

今回のインタビューも、結局そのような線引きになったような気がする。そして透明な鏡が得られて運が良かったと思う。それにも関わらず、無意識的に外だけをみつめながら他人の魅力と短所を探している私には、まだ鏡の前に立つ勇気がないのかも知れない。

### 3 - 2 . 結論 動機から見たインタビューの結果

動機の部分に書いてある言語と国の話はここまで述べた城田さんの魅力と全然関係のない話なのかも知れない。それは結局自分が他人のことを理解するための、つまり安心して接するための手段だった。当時に見えたことは「何か違う、それは何か？」みたいな感じであった。それが逆に要らない枠となり、一生懸命探していた人の魅力はその枠を通じては見えてこなかった。インタビューをまとめながら、自分の習慣的な線引きに気付く始め、開いていない心で相手の魅力の正体を探ることは不可能であることが分かった。今まで信じられなかった言語という手段についても考え直した。今は、言語を信じられなくても信

じる努力が必要だと思う。言語を信じられない理由も、結局言語で模索せざるを得ない上に、相手を理解することとお互いに信頼しあうことは私と相手の語る言語があるからこそできるはずであるから。多分その信頼は城田さんのおっしゃった通りに、言語という手段よりも心から出る「情」に左右されるのであろう。

では、「主人公は私！」というタイトルについて話したいと思う。このタイトルは今回インタビューしてくださった城田さんに一番感心した部分であり、自分にかかる呪文のようなものでもある。最初に漠然と思っていた城田さんの魅力は、確かに「変わった日本人」であることだった。今も城田さんは変わった日本人だとは思いますが、(変わった日本人というよりも変わった人の方に近い)結論から言うと、魅力の源はその変わったところにあるのではなく、物事に対する姿勢にあると思うようになった。それは自分とは違う積極的な姿勢であり、違うから魅力を感じたのではなく、現在の自分に切実な姿勢だということが分かったからである。

一言で言うと、心からの友達を求め、常に自分から働きかけて人間関係のネットワークを広げようとするオープンな心構えが魅力の一つで、後はその積極的な姿勢と人との付き合いが未来観に繋がっていて、自分からこの世を変えようとする強い意志である。

では私が魅力だと思っていたのは自分にはできないことへの憧れだったのだろうか。簡単にそう言われても仕方がないが、私に言わせれば、私はあくまでも自分に向かってやってくることをただ待っていたように思われ、城田さんの積極的な面が見習うべき部分だったのだ。

私は私らしい人生を生きていきたいと思っていた。しかしながら、自分らしさを探ることはしていなかった。インタビューの後、何となく、私の人生は私が生きていくものであることを、私が作っていくものであることを、長い間忘れていたような気がした。何と言えいいのかわからない。ただ今からは、人に会うたびに、人と付き合うたびに、将来のことを考えるたびに、私は城田さんの鼻歌を思い浮かべるようになるだろう。私という人間が変わるか、それは壮語できないことだが。結果はどうであろうと、これからは人生の主人公が自分であることを、忘れないようにしたい。そして、勇気を出して自分が見える鏡を探し、自分の姿を見つめ始める。

#### 4．終わりに

一国の言葉とは何か、どういう意味を持っているのか。

この活動に参加しながら言語の問題を含んだ文化の問題、大きく考えればコミュニケーションの問題について考える機会を得て、大変良かったと思う。それは日本に来なかったとしてもこの世の中で生きていく限り考えるべきことではないかと思う。

私の最初の問題点は言語と国によって考え方も違うようになるという、原因もわからない一種の信念から始まった。私としては、国による特性の違いがマニュアルとして当たり

前のように頭の中に形付けられ、どうしても無視できないことであった。何の疑いもなくそう思っていた。それは多分英語、または日本語で同じ小説を読んだ後の感じの違いからきた考えだろう。それには本質的な違いがあるのか、もしくは単なる印象の違いに過ぎないのか。かなり悩んだあげく、その問題はまた言語の役割に繋がるのに気付いた。考えれば考えるほど、疑問の範囲は続々と大きくなった。言語と意識はどう関わっているのだろう。言語はただ意思を伝える手段に過ぎないのか。

とりあえず、根本的な問題から考えて見る。「人間」とは何かということをかかひのぼっていくと、社会とその社会の歴史、文化ということ全体に行き着かざるを得ない。そしてそれらがどういう関係を持って成り立っているのかを考えた際に、特に人と人との関係を媒介する手段が言語だということを知った。そこまで考えた後、また「コミュニケーション」という巨大な問題に辿り着いた。他人は私でないから、他人の心や意識、思考を完全に知ることは出来ない。それは絶対できないとしても、他人に接する時に見えること、感じるなどから一部だけでも知ることはできる。本当はそうでないとしても、推測の基準にならなくては、相手のことを理解することはできない。他人を理解することは経験からこそできることで、その多くの部分は確かに言語に依存しているに違いない。

さて、今回の活動を通じて思い知ったコミュニケーションの意味とは、人に接する時の言語自体にあるのではなく、私によって解釈される世界と他人によって解釈される世界との出会いにあった。その二つは平行線を保つだけではなく、お互いに影響を及ぼし変容しつつある。その上、二人きりのコミュニケーションだとしても私と相手以外の存在も関与しているから、人の考えを理解することには、その人が生きていく全般的な環境を含んだ世界と文化を考えざるを得ない。

そういう意味で、日本社会に住んでいる人物にインタビューをする作業が、結局日本という社会の中での小さな部分でも理解するためではなかったのか、と思った。しかし、その具体的な実体は見つけれなかった。代わりに、私から見る世界の変容を促す、他人によって解釈される世界の存在が一番多く認識できた。特にその存在を理解することの多くの部分が逆に自己理解に依存しているということが分かるようになった。何故、私は未だにそれに気付かなかったのだろう、と、言わばショックのようにそう感じられた。

しかし、まだどうしても解けない謎が残っている。個人的な話になってしまうが、私はこれから本格的に言語と認識の作用、そしてそれらと社会との関係について勉強したいと思ひ、道を探している。まず言語の本質から勉強を始めたが、とても幅広い勉強であるから具体的な道を探すのに結構時間がかかりそうだ。この活動を通じて新たに生じてきた複雑な疑問が自分の未来さえ変えるかも知れない。

最後に、私の言語が生まれてくる過程を一緒にしてくださった城田さん、そして他人の意見の受け入れ方を教えてくださった言語文化クラスの皆さんに感謝の気持ちを伝えたい。今回を通じて新たに認識された自分の言語が、より輝く文化と世界を花咲くように祈りながら。